

卒 業 論 文

神戸ジャズストリート 衰退からの脱却

平成 28 年 1 月 19 日提出

島田智明 研究室

学籍番号 1152669B

氏名 中西敦郎



## 第1章 はじめに

近年、〇〇ジャズストリートや〇〇ジャズフェスティバルと名のついた音楽イベントが全国各地で催され、街の活性化に大きく貢献している。有名なものでは、大阪府高槻市で行われている高槻ジャズストリートや宮城県仙台市の定禅寺ストリートジャズフェスティバル、比較的新しい例としては滋賀県大津市の大津ジャズフェスティバルなどが挙げられる。本論文ではこのような街中での同時多発型ジャズイベントの中で最も歴史が長く他のイベントの先駆けとなった神戸ジャズストリートに焦点を当て、実際にボランティアとして運営に関わった際の経験と類似イベントとの比較を通して神戸ジャズストリートの課題・発展可能性を研究し、神戸市と神戸ジャズストリート実行委員会へ向けていくつかの改革案を提案する。国内音楽フェスによる地域経済波及効果が数億円規模といわれる昨今、神戸市もこの神戸ジャズストリートは今以上に活用し、地域活性化に役立てない手はないだろう。

そもそも私が神戸ジャズストリートを題材に選んだ理由は二つある。一つは自身が大学で軽音学部ジャズという団体に所属しており、神戸とジャズに関わる大学生活を送ってきたこと。もう一つは、この神戸ジャズストリートというイベントは歴史が長くそれなりに熱心なファンも獲得しているにもかかわらず、ジャズに打ち込む大学生のあいだではまったく話題にならず誰も関心を示さない(もしくは存在そのものを知らない)という現状に疑問を感じたからである。このイベントがさらなる発展を遂げるためにはどうすればよいのだろうか。

次章ではまず神戸ジャズストリートがどういったイベントで、どのような経過を送ってきたのかを見ていきたい。

## 第2章 神戸ジャズストリートの概要と歴史

### 1 概要

神戸ジャズストリートは 2015 年で発足から 34 年を迎えた、日本で最も歴史の長いジャズストリートの名を冠したイベントである。はっきりと明文化されてはいないが、日本のジャズ発祥の地とも言われる神戸において古き良きオールドジャズをハイクオリティで観客に届けることをコンセプトとしている。企画・運営は神戸ジャズストリート実行委員会で音楽顧問はピアニストの秋満義孝、音楽監督はクラリネット奏者の花岡詠二が務めている。10 月の第二土曜、日曜に二日間かけておこなわれ、実行委員 23 名(2014 年時点)と有志のボランティアスタッフ約 100 名によって運営されている。演奏は開演時のパレード以外すべて屋内で行われ、観覧のためにはチケットの購入が必要となる。これは他の同時多発型音楽イベントにはあまり見られない形態であるが、神戸ジャズストリートは長年“屋内での質の良い演奏”というものにこだわって続けてきたようである。このためジャズストリートという名前から街角でのストリートライブを連想して訪れると肩すかしをくらうことがある。二日間開催されるうちの両日ともに、開演時に阪急神戸三宮駅北側から北野坂方面へ向けて出演者たちによるパレードが行われ、ここでの演奏のみ無料で観覧することができるようになっている。

会場は三宮駅付近、北野界限のジャズクラブがメインで、バブル期には最大で全 20 会場で行われていたが、近年は集客減等による規模の縮小傾向にあり 8~10 会場で行われている。私がボランティアスタッフとして参加した 2014 年は神戸外国倶楽部、北野工房のまち、神戸女子大学教育センター、DAY by DAY、ソネ、グリーンドルフィン、インドクラブ、神戸ハプテスト教会、ホテル北野プラザ六甲荘、ANA クラウンプラザホテル神戸、の計 10 会場であった。

料金は 1 日券が 4,500 円、両日券が 8,500 円で前売り価格が各 500 円引き。観客はこれら入場券を購入し、配布されるタグを身につけることによって各会場に自由に入出ることができるようになっている。前売り券は、当日の会場となっているソネ、DAY by DAY、グリーンドルフィン、ホテル北野プラザ六甲荘の他にも、チケットぴあ、東急ハンズ三ノ宮店、ヤマハ神戸店、サントリーバー・ヘンリー、ニューサントリー5、神戸文化ホールプレイガイド、神戸コンサート協会、神戸国際会館プレイガイド、などを通して購入することができる。

メインの 2 日間とは別に、前日の金曜夜には前夜祭というものが ANA クラウンプラザホテルで行われている。ジャズストリート本番にむけて前夜を盛り上げることをコンセプトにして、予約制のテーブルにミュージシャンが同席して食事と演奏を楽しむことができる。参加するミュージシャンはジャズストリート本番にも参加する国内外のミュー

ジシャンたちで、この前夜祭ではサインなども気軽に頼むことができる。会費は 15,500 円(神戸ジャズストリート一日券付き)/18,900 円(神戸ジャズストリート両日券付き)となっており、やや強気な値段設定であることがうかがえる。

後援には兵庫県、兵庫県芸術文化協会、大阪・神戸オランダ王国領事館、関西アメリカンセンターがあり、スポンサー企業は SUNTORY と富士通テンの 2 社のみである。

当日はおよそ 100 名のボランティアスタッフがチケット販売や物販、搬入・搬出、導線などの役割をこなしている。ボランティアスタッフは有志で募集されており、40～50 代以降の人が多く若年層はあまり見られない。これらボランティアスタッフは両日ともに仕事が割り振られジャズストリート本番を見て回るができないため、実行委員側から「出演者との交換パーティ」という催しが用意されており、1 日目終了後の午後 6 時から 8 時にかけて出演者を交えた食事会に参加することができる。また、組織構造的にボランティアスタッフから意見が出て実行委員会による運営に大きな変化が起こるということはほとんどなく、あくまで運営に関する企画・立案は実行委員会にほぼすべて委ねられている。

演奏される音楽はディキシーランドジャズやスウィングジャズなどの形態が多く、伝統的なスタイルにこだわっている。

## 2 歴史

ここで、どういった経緯でこのジャズストリートが始まったのか、またどのように発展してきたのかを述べる。神戸ジャズストリート実行委員会が編集し同委員会によって発売されている『神戸ジャズストリートの 30 年』の文中において初代実行委員長の故末廣光夫氏は開催の契機について次のように語っている。

「大阪の万博が終わって 10 年後の 1981 年に、今度は神戸でポートピア博覧会が春から秋にかけて行われて、その夏の時期に国際広場での「インターナショナル・ジャズ・フェスティバル」が 8 月の 4 日間、昼夜にかけて行なわれ、なんと 4 万人の観客が詰めかけたのは、日本のジャズ史上初めてのことでした。／そして年が替わっても、その夢は消え去らず、そこで考えついたのが、神戸の山手界限でジャズのイベントをやってみたら？・・・と。(中略) ここらあたり一帯にジャズ・ファンを集めるには自信がありました。それだけでなくそれまでなかった「同時多発型」の粋なジャズ・イベントを。それも気候のいい秋 10 月の 2 日間にかけて催してみたら・・・。ということでプランニングに入りました」(神戸ジャズストリート実行委員会 2011, p. 15)

ここから、1981年のインターナショナル・ジャズ・フェスティバルに感銘を受けた末廣氏が、それまでには存在しなかった同時多発型のジャズイベントを仕掛けたことが発端だということがわかる。今でこそ全国各地で催されている同時多発型のジャズフェスティバルであるが、神戸ジャズストリートがその先駆けであり、末廣氏はジャズイベントの革新者だったと言える。

1982年に第1回神戸ジャズストリートが開催され、2015年で34回目を迎えることとなった。当初は市が設立した神戸市民文化振興財団が事務を担当していたが、1992年からは企画・運営のすべてを実行委員会に移した。これによってジャズストリートはより多くの市民を巻き込む形で発展していった。

1995年の震災時には実行委員会や会場となるライブハウスなど多くの関係者も被害を受け、開催は絶望的かと思われたが、全国各地のファンや地元プレーヤーからの励ましの声もあり、震災から10ヶ月後にみごと第14回目の開催にこぎつけた。この年の神戸ジャズストリートの開催によって当時観光客が激減していた北野に人が押し寄せ、街に活気を取り戻す原動力となった。神戸ジャズストリートの風物詩ともなっているオープニングパレードは街を元気づける意味もこめてこの年から行われるようになり現在まで続いている。

また1991年にスウェーデンからのゲストビッグバンドを初めて招聘し、その後フランスやオランダなどのヨーロッパで活躍するミュージシャンにも目をつけるようになる。1993年にオランダのブレダ・ジャズフェスティバルを実行委員会のメンバーが視察し、その年の秋にオランダのジャズ・オスマチック・フォアという少人数のバンドを神戸へ招聘する。以降ブレダ・ジャズフェスティバルと交流を深め、オランダからミュージシャンを招聘すると同様に日本からもミュージシャンを送り出す仲となっている。

震災復興の活力となったことや国際的取り組みが評価されてか、1996年にサントリー地域文化賞を受賞している。

2005年の秋にはそれまでボランティアスタッフが開設して運営していただけのホームページを、実行委員会として正式にリニューアルしている。ここではインターネットを取り巻く環境の変化に対応し、見やすく情報の鮮度が高いWEBサイト開設をすることで、全国各地に存在するジャズストリートの中でも神戸ジャズストリートというイベントを明確にブランディングする目的があった、と実行委員会の万代氏がアットマーク株式会社とのインタビュー形式の対談で答えている。

このように神戸ジャズストリートは同時多発型ジャズイベントの先駆けとしてそのキャリアをスタートし、神戸に寄り添いながら国外のミュージシャンとも交流を深めつつ発展し、多くのファンを獲得してきた。

こうして 2000 年代前半までは規模の拡大を続けながら発展してきた神戸ジャズストリートであるが、近年は集客数が伸び悩み縮小傾向にある。演奏されている音楽や出演ミュージシャンの質は劣化しているわけでもない。なぜ神戸ジャズストリートは年々規模の縮小を余儀なくされているのだろうか。以降で神戸ジャズストリートの現状を述べ、その後国内の他の同時多発型ジャズイベントとの比較と、筆者が実行委員会会議を聴講したのちボランティアスタッフとして実際にイベントに参加した際の経験をふまえて神戸ジャズストリートの問題点を分析する。

### 第3章 神戸ジャズストリートの現状

図1. 神戸ジャズストリート入場者数推移

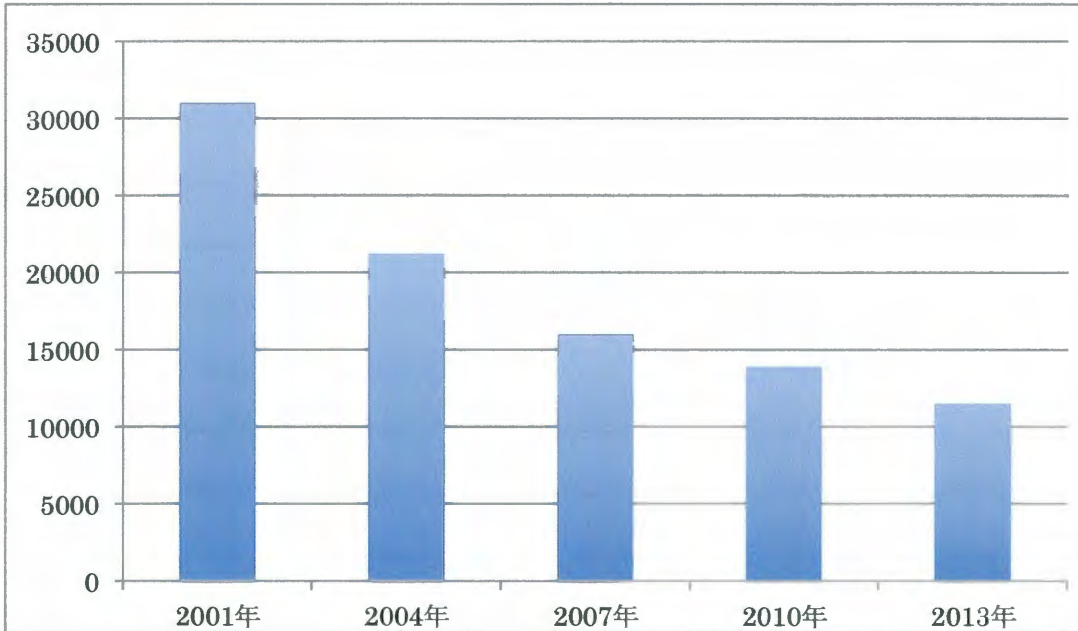


表1. 会場数推移

1982年	1983年	1984年	1985年	1986年	1987年
11	10	10	9	10	11
1988年	1989年	1990年	1991年	1992年	1993年
11	13	13	11	13	17
1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年
14	13	16	17	19	20
2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年
20	21	16	17	18	18
2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年
12	11	11	12	11	11
2012年	2013年	2014年	2015年		
8	10	10	10		

神戸ジャズストリートは近年、大幅に規模の縮小傾向にある。神戸市民文化振興財団から提供を受けた資料によると2000年以降における3年おきの入場者推移は以下の表のようになっている。2001年には2日間の合計で最大31,000人の来場者数を記録して



いるが、その後は21,200人(2004年)、16,009人(2007年)、13,900人(2010年)、11,494人(2013年)というように明らかに減少を続けており、2001年からの12年間で半分以下の数字になっている。さらにこの来場者数の記録に用いられている数字は会場ごとの入場者数を単純に足し合わせただけのものであるため同一人物による重複が多く含まれており、実際にフリーパスチケットを購入している人の数はこれよりもさらに少ないものと予想される。

入場者数の減少傾向と同様に会場数も少なくなっており、2001年の21会場をピークに直近の2015年はその半分以下となる10会場での開催となっている。会場についての詳細は、2001年がソネ(ジャズクラブ)、アルバトロス(ダイニングバー)、デイ・バイ・デイ(ジャズクラブ)、花屋敷(スナック/ラウンジ)、神戸ハプテスト教会、神戸外国倶楽部(会員制社交クラブ)、北野工房のまち(体験型観光スポット)、セ・エム・アッシュ(パン屋)、クロス(レストラン/バー)、神戸電子専門学校内ソニックホール、北野ミュージアム、新神戸オリエンタルホテル内クリスタルルーム、新神戸オリエンタルホテル内バー・レスカル、アベニュー広場、NHKふれあいパーク、中華会館(レンタルホール)、OPA広場、味加味(レストラン)、ホリーズ(ライブレストラン)、ケントス(ライブレストラン)、タンジェリン、ネザーランズセンター、と老舗ジャズクラブから飲食店、貸しホール、広場と幅広く展開していたのに対し、2015年はソネ、デイ・バイ・デイ、インドクラブ(レンタルホール)、グリーンドルフィン(ジャズクラブ)、神戸ハプテスト教会、ホテル北野プラザ六甲荘、ANAクラウンプラザホテル内ザ・バー、神戸外国倶楽部、北野工房のまち、神戸女子大学教育センター、と普段はジャズと関連のない飲食店等は含まれておらず、全盛期の北野一帯を巻き込んだのジャズストリートとは程遠い会場内訳となっている。

出演するミュージシャンの顔ぶれはここ5年ほどでさほど変化はない。参考として直近の2015年第34回ジャズストリートに出演したミュージシャンを以下に記す。

#### <第34回出演ミュージシャン一覧>

(氏名横の記号はp=ピアノ、b=ベース、ds=ドラム、cl=クラリネット、ts=テナーサクソ、cor=ホルネット、tp=トランペット、tb=トロンボーン、vib=ヴィブラホン、bjo=バンジョー、g=ギター、tuba=チューバ、vo=ボーカル、per=パーカッション、vln=バイオリン、をそれぞれ指す)

#### ▽国内ミュージシャン

秋満義孝(p) 北村英治(cl) 五島健史(tb) 新井雅代(vo) 石井順子(vo)

山本琢(p) 鈴木直樹(cl, ts) 鍋島直稔(vib) 辛島すみ子(vo) キャンディ浅田(vo)

小林真人(b) 花岡詠二(cl) 青木研(bjo) 熊田千穂(vo) 十川尚子(vo)  
 水田欽博(b) 池田公信(cor) 佐久間和(g) 田中ミドリ(vo) 原田紀子(vo)  
 藤田洋(ds) 広瀬未来(tp) 井桁賢一(tuba) 森朋子(vo) 上杉亜希子(vo)  
 大塚善章トリオ〔大塚善章(p) 神田芳郎(b) 上場正俊(ds)〕  
 川瀬健トリオ〔川瀬健(p) 井出厚(b) 石川潤二(ds)〕  
 ヨー・エリ・トリオ〔木村陽一(ds) 渡辺絵理(p) 脇本総一郎(b)〕  
 高岡正人トリオ〔高岡正人(p) 魚谷のぶまさ(b) 能勢英史(g)〕  
 平沼昇一トリオ〔平沼昇一(b) 金丸精志(p) 西本憲史(ds)〕  
 宮本直介トリオ〔宮本直介(b) 高橋俊男(p) 田中ヒロシ(ds)〕  
 zmg with 岡本健太〔宮川真由美(p) zingoro(b) ガリバー柳(ds) 岡本健太(per)〕  
 モンデュー〔奈倉翔(vln) 伊藤淳介(g) 秦弘作(g) 長谷川光(b)〕  
 岡山デキシーブレード キャッスル・ジャズバンド  
 ニューオリンズ・フォーティーズ ニューオリンズ・レッドビーイズ  
 フラット・ファイブ+原田紀子 マホガニーホール・ストンパーズ  
 ロイヤルフラッシュ・ジャズバンド ザ・フィール・ジャズ・オーケストラ  
 富士通テンビッグバンド モダンタイムズ・ビッグバンド  
 神戸マス・クワイア  
 ▽海外ミュージシャン  
 アントワーン・トロメレン(sax, オランダ) ロバート・ビーン(sax, オランダ)  
 エンゲルベルト・ロウベル(cl, ts, ドイツ) マロ・マズリエ(tp, フランス)  
 ブルックス・テグラール(ds, アメリカ) シャノン・バーネット(tb, オーストラリア)

これら出演者たちの8割ほどは中堅～ベテランと呼ばれるキャリアをもつミュージシャンたちで、若手ミュージシャンによるプログラムは非常に少ない。またほとんどがプロミュージシャンで構成されており、アマチュアバンドの存在は数えるほどである。

出演者の高齢化が目立つ神戸ジャズストリートだが運営の高齢化も着々と進行している。実行委員会の平均年齢は60歳を超えていると思われ、神戸市と神戸市民文化振興財団の関係者の比較的若手人材が若干名実行委員会入りしているが、それらの人間をのぞくと組織的高齢化が顕著である。また筆者が2013年にボランティアスタッフとして会場入りしたときは、来場する観客も中年以上の年齢層が多く見受けられ、学生や20～30代と思しき人はほとんど見当たらなかった。

かつてはスポンサーとして、沢の鶴、大塚製薬、ツーカーホン関西、中納言、UCC上島珈琲、北野商業連合、がついていたこともあったが現在はサントリーと富士通テンの

2社のみとなっており資金調達の面で厳しい現状となっている。

ここまで神戸ジャズストリートの現状をみてわかることは、運営・来場者・出演者の高齢化によって若者を取り込むことができていないということ、若者の潜在需要を取り込むことができないことで来場者数は落ち込み結果的にスポンサーが見つからない状況になってしまっているということの2点である。次章で国内ジャズストリートでも比較的大規模かつ安定した集客数を記録している高槻ジャズストリートについて調査し、比較を行うことで神戸ジャズストリートの抱える問題点と解決策を検討する。

## 第4章 高槻ジャズストリート

高槻ジャズストリートは有志の市民ボランティアである高槻ジャズストリート実行委員会によって運営されている同時多発型ジャズイベントで、集客面において国内ジャズストリートの中でも最も成功しているうちのひとつである。1999年に始まったこのイベントは2015年で17回目を迎え、開催される2日間の合計でおよそ10万人規模の来場者数を誇る。

会場は阪急高槻駅とJR高槻駅を中心に、屋内・野外を含め複数会場で行われる。野外の会場として使用されているのは、小学校のグラウンドや市民グラウンド、ビルの屋上、高架下特設ステージ、駅前広場と大小さまざまで、気軽に立ち寄って演奏を楽しむことができる。屋内会場は飲食店、ライブハウス、大学キャンパス内講堂、高槻現代劇場内ホールなどで、こちらは座ってゆっくりと音楽を楽しむことができるような会場のつくりである。2015年開催の第17回高槻ジャズストリートは全57会場で行われた。神戸ジャズストリートが北野周辺を中心に行っていることと比較すると、非常に大規模な開催内容となっているが駅周辺から少し離れた会場へは無料で巡回バスが運行しており各会場へのアクセスもしやすくなっている。また移動中のバス車内でミュージシャンが演奏していることもあり移動そのものも楽しめる仕組みになっている。阪急高槻駅を降りるとすぐに高架下のステージでの演奏が聞こえて来る高槻ジャズストリートは、イベントが催されているということが一目でわかり、買い物に訪れた人たちの目にも付きやすく関心を惹きやすい。

出演するミュージシャンは中学生によるビッグバンドから大学生や社会人アマチュアミュージシャン、日本国内全域で活躍するプロミュージシャンに海外からの超大物ゲストまで幅広い。規模が大きいため出演者数も非常に多く759組にのぼる。高槻ジャズストリート側が招いたプロゲスト以外の枠は公募による簡単な音源審査ののち抽選で選ばれるようになっている。筆者の経験上、音源審査自体のハードルはそこまで高くないが毎年多数の応募が集まるため抽選で出演に至るにはかなりの運が必要になる。2013年にはゲストミュージシャンに生きる伝説とも言えるアルトサックス奏者のリー・コニッツをアメリカから招聘するなどして大きな話題を呼んだ。また、ジャズストリートと銘打っているが各会場で演奏されている音楽のジャンルはジャズに限定されておらずロックやポップスのような演奏を聴くこともできる。このように出演者の年齢層や演奏されるジャンルの幅が非常に広いという点に、老若男女さらにはコアなジャズリスナーからジャズを普段から愛聴しているわけではないがただ単に音楽が好きだという人までさまざまな人が楽しめる要素が詰まっている。2015年のゲストミュージシャンは、

アラベスク、伊丹市立伊丹高等学校 ICHI☆ITA JAZZ Ensemble、今西祐介、大山日出男、川嶋哲郎、岸ミツアキ、ギラ・ジルカ、桑山哲也、今陽子、椎名豊、ニューヨーク・ヴォイセス、日野皓正、TRI HORN BUFFALO、中本マリ、西藤ヒロノブ、Vermillion Field、フィリップ・ストレンジ、Fried Pride、古谷充、堤秀彰、Hong Soon Dal の Baraman Jazz、牧山純子、THE MAN、宗清洋、ら 24 組であった。ちなみにこれらはパンフレットにゲスト枠として記載されているミュージシャンたちであるがこのほかにも一般公募枠で多数のプロミュージシャンが出演している。

各会場への入退場は自由でチケットの購入なども必要ない。会場となっている飲食店などでは 1 ドリンクのオーダー程度を頼まれる場合もあるが基本的には無料で音楽を楽しむ。このためジャズというワードにハードルを感じがちな人であってもイベントへ気軽に足を運ぶことができる。

チケット代を設定していないが、実行委員会主導の飲食ブースを設置したり、イベント関連グッズを作って積極的に販売したりすることで運営資金をカバーしている。2014 年は市民グラウンドのハイネケンステージと桃園小学校グラウンド内の FM COCOLO ステージで飲食店ブースを設置し、ホットドッグや高槻うどんギョーザ、その他スイーツなどを販売し飲食店ブースだけで 499 万円の収入(主催者公表)をあげている。音楽を演奏するだけでなく飲食店ブースを運営することで観客の耳だけでなくお腹も満たしてしまおうという試みは高槻ジャズストリートの名物のようになりつつある。飲食店ブース以外での T シャツや帽子などのイベント関連グッズの売り上げも好調で 2014 年度のグッズ売り上げ収入は 759 万円(主催者公表)であった。高槻ジャズストリート T シャツは販売価格 2,000 円から原価の 500 円を引いた 1,500 円が運営資金に回されるということがパンフレットにも大々的に記載されており、高槻ジャズストリートを続けてもらうためにも買ってあげたいという来場者の購買意欲を刺激する工夫がなされている。

高槻ジャズストリートの特徴として演奏を楽しむ以外のコンテンツも多数用意されていることがあげられる。例として、サクソ奏者の川島哲郎氏によるジャズ講座や、関西スウィングダンス界のトップスターチャーリーニシオ氏によるダンス教室、子供向けアトラクション、フリーマーケット、アート作品の展示など、より幅広い年齢層の人が楽しめるようなコンテンツが顔を並べる。

高槻ジャズのスポンサーは全 33 社でスポンサー企業の詳細は関西大学、くら寿司、箕面テニスクラブ、城北通商店街、アクトアモーレ、Jack Daniel's、C' BON、カエルの家、ILLINOIS、アクティプリント株式会社、URGE、KIRIN、阿佐建築工務株式会社、株式会社コヤマカンパニー、Asahi、SUNSTAR、大桑皮フ科、SUNTORY、株式会社おだやか、JK's STAFF、COSMETICS GALLERY RIN、J:COM 高槻、JAPAN AUTO CLUB INC、ジュ

ピター音楽院、阪急電鉄、北おおさか信用金庫、ビジュアルアーツ専門学校大阪、株式会社高浄、松井診療所、満屋ハウジング、高槻市商店街連合会、日本たばこ産業株式会社、むねみつ診療所となっている。関西を代表する大企業から地元企業まで多くのスポンサーから支援をうけている。これらは高槻ジャズストリートのグランドスポンサーであるが、このほかにも個人や団体多数からの寄付・募金、おおくのパンフレット広告掲載主の支えも運営を支えている。

2001年には財団法人大阪21世紀協会による大阪スグレもの21賞、2005年には第22回大阪まちづくり功労者賞、2009年には大阪ミュージアム登録物に認定されるなど各方面から高い評価を得ており、ここからも非常に成功をおさめているイベントであることがうかがえる。

運営を支えるボランティアスタッフの数が神戸と比較しても圧倒的に多いことにも触れておきたい。過去最も多かったときで2008年の3000人ものボランティアスタッフが運営を支えており、その他の年でも開催初期を除けば安定して1000人前後がボランティアとしてイベントに参加している。神戸ジャズストリートとは異なり、企画運営のすべてがこれらのボランティアスタッフによって行われており、イベントへの関わり方にも柔軟性がある。イベント当日に会場設営や資材運搬、飲食店ブースの運営に携わるといったものから、当日までに行われるパンフレット作成やミーティングでの企画に携わるといったものまで誰でも参加可能である。一度参加したボランティアには翌年以降も継続して参加してもらいたいという基本的なスタンスは掲げているものの、当日のみ飛び込みで参加することも可能となっているようだ。また神戸ジャズストリートはボランティア募集がいつどの程度行われているのか情報を得にくいが高槻ジャズストリートでは公式サイトに大々的にボランティア募集を掲げて積極的にアピールを行っていることも人数を集めるうえで功を奏している。

これほどまでに市民ボランティア主導で街全体を巻き込んで行われているのはそもそもそのイベントが始まった背景によるところが大きい。神戸ジャズストリートが日本ジャズ発祥の地といわれる神戸でジャズ愛好家の末廣光夫氏の思いつきによって始まったものであるのに対し、高槻ジャズストリートはもともとまちおこしを目的としてなんとなく人が集まりそうなジャズをやろうという名目で始まった。その際に中心となったのが高槻市の地元商店街であり、高槻を知ってもらい、高槻に人を呼んで、高槻で消費してもらおうという目的があったので、街全体をまきこんで演奏面以外でも老若男女がたのしめるさまざまなコンテンツが用意されているのだ。

## 第5章 比較による考察

神戸ジャズストリートの現状と高槻ジャズストリートとの比較を行うことで見えてくる課題・問題点は何だろうか。神戸と高槻ではイベントの開催規模と集客数に非常に大きな差がある。この差はいったいどこから生まれるのか。

神戸と高槻、どちらも同じジャズストリートという名の同時多発型ジャズイベントであるが、両者を比較すると大きな違いが3つある。一つ目は料金面、二つ目は出演ミュージシャンの選び方やイベントのブランディング面、三つ目は意思決定やその柔軟さに関わる組織面である。

まず一つ目の料金面についてここまででも述べたことを再び整理すると、神戸ジャズストリートは観覧に際してチケットの購入が必要であり、1日券が4,500円、両日券が8,500円で前売り価格が各500円引き。支払いと同時に手渡されるフリーパスを提示することで各会場への出入りが可能となる。高槻ジャズストリートではチケットの購入等は特に必要なく会場によっては1ドリンクオーダーする程度の出費で各会場を見て回ることができる。この料金面での大きな違いは間違いなく集客数に影響している。2014年、スカパーJSAT株式会社が10代から60代までの男女1000人を対象におこなった最も好きな音楽ジャンルに関するアンケートでは、ポップスが46.6%で1位、以下ロック12.3%、アニメソング12.1%、演歌歌謡曲8.9%、クラシック6.1%、フォーク4.4%と続きジャズは3.0%で13項目中7位であった。この結果からも分かるように、ジャズという音楽が普段から幅広い人々に支持されているわけではないということを考慮すると、高槻の入場無料に対して神戸の1日4,500円のチケット購入では客足が遠のいてしまうのも無理はない。また他の大規模なジャズストリートに、仙台の定禅寺ジャズストリートや大津の大津ジャズフェスティバル、横浜ジャズプロムナードなどがあるがこれらのいずれも入場無料もしくは一部無料会場の設置という形態をとっており、新規イベントがぞくぞくとたちあがり競争が激化しているジャズストリート界の中でも神戸は料金面だけで一部のコアなファン以外からは無視されうる存在になりつつある。神戸ジャズストリート実行委員会としては、これだけのゲストをよんでおいて4500円の何が高いのだといった旨の発言が「ジャズの街神戸」関係者協議会議事録に残されていたが、ここに消費者(来場者)側と運営側の感覚のズレが見て取れる。高槻やその他ジャズストリートが無料で開催に漕ぎ着けることができるのは、多くのスポンサーや協賛主がついていることと、飲食店ブースの設置など入場料以外で収入を得る体制を模索して実行しているためだ。神戸も新しい収入を得る仕組みを検討する必要があるのではない

だろうか。

二つ目、イベントのブランディングに関しての高槻と神戸の大きな違いは、高槻の方がより出演ミュージシャンや演奏されるジャンルに幅を持たせ多くの人のニーズに応えた音楽を提供しているということだ。神戸と高槻にはジャズという同ジャンル内での演奏スタイルのバリエーションの違いと、ロック、ポップスなどを含むか含まないかという演奏されるジャンルの違いがある。

「ジャズ」という音楽に関してはひとことにジャズといっても様々なスタイルが内包されており、同じジャズでも演奏形態によって好みの分かれるものとなっている。先にジャズというくくりの中で両者にどのような違いがあるのかを分析するためにジャズ内でどのような演奏スタイルの違いが存在するのかを簡単に説明しておく。

#### ①ニューオーリンズジャズ

ニューオーリンズジャズは 20 世紀の初め頃に生まれた、ジャズと呼ばれる音楽の初期のスタイルで、後のジャズのおおもととなった形式である。黒人発祥のブルースやラグタイムなどの音楽要素が混ざり合って生まれたとされる。この時代の主なミュージシャンではルイ・アームストロングが有名で、彼がジャズの演奏における最大の特徴であるアドリブによる即興演奏を発展させた。

#### ②ディキシーランドジャズ

ディキシーランドジャズはニューオーリンズジャズと同時代に演奏されていたスタイルで、ニューオーリンズジャズは黒人発祥で黒人が発展させた形態であるのに対し、ディキシーランドジャズはそれを白人が模倣して確立されたスタイルである。ピアノ、ギター、バンジョー、ドラム、ベースなどのリズムセクションのうえでトランペット、トロンボーン、クラリネットなどが即興演奏を展開していく。黒人が演奏しているか白人が演奏しているかという部分がニューオーリンズジャズとの主な違いであり、音楽的な観点からみると、ニューオーリンズジャズとディキシーランドジャズを分ける要素はほぼない。

#### ③スウィングジャズ

スウィングジャズは 1930 年代から 1940 年代初め頃にかけて頻繁に演奏され、大衆に広く支持された大人数の編成による演奏形態。いわゆるビッグバンドといわれるバンド形態で演奏されるものである。ニューオーリンズジャズやディキシーランドジャズでは演奏者の即興演奏部分に重きが置かれていたがここでは大人数のバンド全体でのアンサンブルに重きが置かれて演奏される。スウィングのリズムから溢れるウキウキするよう



なフィーリングと大人数のアンサンブルからくる刺激的なサウンドが出現当時の人々におおいに受け、ダンスミュージックとして広く親しまれた。代表的なミュージシャンとして、デューク・エリントンやカウント・ベイシー、ベニー・グッドマン、パパ・ジョー・ジョーンズ、ライオネルハンプトンなどが挙げられる。

#### ④ビバップ

ビバップは1940年代初頭にアルトサクソフーン奏者のチャーリー・パーカーやトランペット奏者のディジー・ガレスピーらによって確立されたスタイルである。ビバップやビーバップ、バップと呼ばれることもある。演奏の初めにテーマと呼ばれるサビのような部分を演奏した後に、テーマのコード進行に沿って演奏者によるアドリブが繰り広げられる。近年、居酒屋やラーメン屋などの店内BGMでジャズを耳にすることが少なくないが、ここでかかっているのがこのビバップといわれるジャンルであることが多い。一般的にジャズと言われて最もはじめに頭に浮かぶジャズのイメージそのもののスタイルであるといつて差し支えないであろう。スイングジャズが大衆も聴きながら踊って楽しめるダンスミュージック的側面を含んでいたのに対しビバップは演奏者によって繰り広げられるアドリブに耳を傾け、バンドの演奏がどのように変化していくかを楽しむ音楽となった。代表的なミュージシャンとして前述のチャーリー・パーカーやディジー・ガレスピー、バド・パウエル、セロニアス・モンク、ソニー・ステイットなどが挙げられる。

#### ⑤ハードバップ

ハードバップは1950年代中頃からビバップにアンサンブルやヘッドアレンジ、より尺の長いソロなどの形式的洗練が加えられていったスタイル。黒人によって盛んに演奏され、黒人のパワーとエモーションが前面に押し出されたスタイルと言える。このハードバップはアート・ブレイキー&ザ・ジャズメッセンジャーズやマイルス・デイビスのグループらによって1950年代中頃から1960年代にかけてのジャズのメインストリームに成長した。芸術性と大衆性とがうまく共存したスタイルと言うこともでき、現代のジャズミュージシャンにもハードバップ的演奏をする人は少なくない。こちらも店内BGMなどでよく流れていて、比較的聞き馴染みのあるものであると言える。歴史的に代表的なミュージシャンでは、アート・ブレイキーやリー・モーガン、クリフォード・ブラウン、ソニー・ロリンズなどが挙げられる。

#### ⑥ラテンジャズ・アフロキューバンジャズ

ラテンジャズ・アフロキューバンジャズはハードバップにルンバやマンボなどのスウィングしないビートを取り入れて発展した音楽である。キューバやプエルトリコなどにおいても広く普及し、サルサなどの音楽にこの要素が含まれていく。

#### ⑦モードジャズ

モードジャズはマイルス・デイビスなどによって確立された演奏スタイルである。詳しい音楽理論的説明は省くが1950年代から1960年代にかけてビバップから脱するべく誕生した、コード進行にとらわれずメロディーラインを生かした演奏である。マイルス・デイビスやビル・エバンス、ジョン・コルトレーンらが試行錯誤を重ねて新しい響きを生み出したもの。

#### ⑧ジャズロック

ジャズロックはハードバップを基調として、そこに私たちが一般的に最も聞き馴染みがあるであろう8ビートのリズムを組み込んで演奏されるジャズを指す。フュージョンという形態のもととなったものと言える。

#### ⑨フュージョン

フュージョンはジャズミュージシャンがジャズの伝統的なスタイルにロックやポップス、R&B、民族音楽、電子音楽などのさまざまな要素を取り込んでいった結果誕生したジャンル。ジャズかジャズではないかの意見が分かれるスタイルであり、区分けが非常に難しい。1970年代後半から1980年代後半にかけては日本でも爆発的なブームが起き、T-SQUAREやカシオペアなどがこれにあたる。テレビやラジオのBGM、スーパーやコンビニの店内BGMとして聞き馴染みのある音楽ではないかと思われる。クロスオーバーと言われることもあり、またフュージョンをさらに大衆向けに聞きやすくしたものをスムース・ジャズなどと呼ぶこともある。海外の著名なミュージシャンではシャカタクやイエロージャケッツ、ウェザーリポート、パットメセニーグループらが挙げられる。

#### ⑩コンテンポラリージャズ

コンテンポラリージャズは現在進行形で形を変えている最新の形態を指す。正確には非常に分類分けの難しいものであるが、便宜上フュージョン以降のジャズミュージシャンによって演奏されている音楽をコンテンポラリージャズと呼ぶこととする。現代のミュージシャンたちによって演奏されるコンテンポラリージャズは上述したすべてのスタイルに加えて、そこへヒップホップやR&B、ミュージシャンの出身国の民族音楽の要素がとりこまれているものなどさまざまである。曲の基本形態もさまざまで、ビバップやハードバップのようにテーマのあとにそのコード進行上でアドリブが演奏されてテーマに戻ってくるようなスタイルもあれば、曲中をとおして絶えず場面が転換されていくもの、変拍子を多く取り入れたものや、曲中でまったくリズムや拍の感じ方が変わってしまうものなどがあり、一概に演奏形態を文章化することはむずかしい。

以上のようにジャズという音楽はその内部にさまざまなスタイルを含んでいる。①～

④のような年代の古いオールドジャズといわれるスタイルばかりを好んで聴く人もいれば、⑨フージョン以降のスタイルを好んで聴きオールドジャズはさっぱりだというリスナーも存在する。もちろんすべて好きだという人も存在することはまちがいないが、筆者が所属するジャズ研内でインタビュー形式の調査をおこなった結果、古いスタイルを好む人は新しいスタイルを、新しいスタイルを好む人は古いスタイルをそれぞれ苦手だと感じている傾向が強い。これらをふまえたうえで、神戸ジャズストリートと高槻ジャズストリートで演奏される「ジャズ」の違いに注目したい。

神戸ジャズストリートで演奏されているのは基本的に①～④のようなオールドジャズがほぼすべてを占める。神戸ジャズストリートは開催当初からこのようなオールドジャズ・クラシックジャズの演奏を一貫して守り続けているのだ。この一貫したスタンスを強調するように神戸ジャズストリートの公式 HP には「日本の都会にはジャズストリートが溢れているけれど・・・」という見出しで次のような文章が述べられている。

「秋 10 月、金木犀の花の香りが漂ってくると、神戸のジャズの季節でもある。そして、この街のジャズも、25 年前に神戸ジャズストリートが始まった頃と少しも変わらない。それは、第二次世界大戦後の 50 年前から同じスタイルのジャズを受け継いで生きたからだ。ジャズは日進月歩というけれど、神戸は違う。クラシック・ジャズというかオーソドックスなジャズを守り続けている。いまのアメリカに失われている伝統のジャズが<神戸ジャズストリート>のメインのジャズで、そこがヨーロッパのジャズシーンと似ている点だ。今年も、そのヨーロッパから優れたジャズメンたちがやってくる。彼らはいう。「神戸のジャズ・ファンの熱心さは世界のどこにも見当たらないくらいだ！」と。そのファンの熱意にこたえて、彼らの演奏にはより一層の力がこもり、神戸でしか聴かれない素晴らしいジャズを演じてくれる」（神戸ジャズストリート公式 HP <http://www.kobejazzstreet.gr.jp/spirit/index.html> より抜粋）

ここからも神戸ジャズストリートはクラシックなスタイルのオールドジャズにこだわって演奏し、それをアイデンティティーとしていることがわかる。このため演奏するミュージシャンも年代的にクラシックなスタイルに対する教養や経験の豊富な中堅～ベテラン勢が大半を占めることとなり、顔ぶれに変化は起こりにくい。この点で、神戸ジャズストリートはオールドジャズを好むリスナーに対しては強力な求心力を有しているがそれ以外のジャズリスナーにとっては関心の薄れるイベントとなってしまう。このため一部の熱心なオールドジャズリスナーは長年にわたって神戸ジャズストリートの熱心なファンとして度々足を運ぶが、多方面からジャズを聴き始めた若年層のリスナー

のような人を新規観客として獲得する機会を逃している。

一方高槻ではどのようなジャズの演奏がなされるべきかという点に関してこれといった縛りは存在せず、若手からベテランまで様々なミュージシャンが思い思いのスタイルで演奏を繰り広げる。このため幅広い層のジャズリスナーの要求にこたえることのできるラインナップとなっており、より多くの観客を獲得しやすい。実際に両イベントに足を運んでみてもその差は歴然で、神戸では中年以降の観客が大半を占めるのに対し、高槻では中高生や大学生などの若者からお年寄りまで幅広い層の観客を目にすることができる。

また神戸ジャズストリートはオールドジャズにこだわっているため、もちろんジャズ以外の演奏はほとんど聴く機会はないが、高槻ジャズストリートではポップスやロックのような雰囲気をおわせる出演者も複数存在する。普段からジャズを聴かない人にとってもなじみのある音楽が提供されていることによってイベントへ参加することのハードルがぐっと下がり、ポップスから聴き始めてジャズの会場にも立ち寄るといような新規ジャズリスナーの獲得にも成功しやすい。また、高槻はゲストに、普段はジャズを聴かないような人でも名前を知っているゲストミュージシャンを招聘し大ホールで演奏してもらうことが多く、これには毎回大勢の人が押し寄せる。このような大衆性が存在するかどうかにも集客に大きく影響してくるものと思われる。

それぞれの会場に関しても着目したい。高槻では屋内・屋外それぞれ複数の会場で演奏がおこなわれるが、神戸は屋内会場のみとなっている。神戸では音響・音楽の質にこだわって屋内会場に限定しているということだが、屋内でのみ開催される同時多発型の音楽イベントは外から会場の雰囲気がつかめず新規観客を獲得しにくく、またイベントが行われているということ自体が会場周辺に認識されづらいというデメリットが存在する。

三つ目にそれぞれの組織形態に関して比較する。神戸ジャズストリートは少数の実行委員会が企画・運営を行いボランティアスタッフは当日のチケット販売や資材運搬、会場案内などの役割に従事するのみであったが、高槻ジャズストリートでは当日の業務に加えてイベントそのものの企画・運営もすべてボランティアスタッフによっておこなわれ、またこのボランティアスタッフには誰でも参加可能、というものだった。どちらがより優れているというわけではないが、現状では高槻の方が誰でも意見のできる柔軟な組織構造になっており、それまでになかったものを取り入れてイベントを変革していくことができている。神戸は少数の固定メンバーが運営指揮をとり続けており高齢化も進行しているため新しい変化が起きにくく、保守的な空気が漂っている。

ここまででわかる神戸ジャズストリートの課題・問題点は、他の競合ジャズストリートに比べて割高の料金設定、限定された音楽のバリエーション、「見える化」の施されていない会場、組織の高齢化に伴う革新性の喪失、の4つである。

## 第6章 神戸ジャズストリートはどう変わっていくべきか

第6章では以上の結果をふまえたうえで神戸ジャズストリートへの提案を行う。神戸ジャズストリートのすべてが他の現在進行形で成功しているジャズストリートに比べて劣っているというわけではないが、全国でジャズストリートの競争が激化する中でかつては先駆的存在であった神戸の存在感が薄れていることは来場者数の減少と開催規模の縮小を見ても明らかだ。ここでは神戸ジャズストリートの強みを生かしながらより集客の期待できるイベントへと発展させるための方法を提案する。

まず初めに組織は常にイノベーションを起こすべく試行錯誤を繰り返し、新しいことを実行していくべきであるということを実感しなければならない。これと同時に、人々から求められるものは刻一刻と変化しておりその変化にともなう組織も柔軟な変化を成し遂げていかなければならないということも自覚する必要がある。神戸ジャズストリートはこれまで一貫して古き良きオールドジャズを演奏し観客に楽しんでもらうことを貫いてきたが、これだけでは今後も新しくファンを獲得して規模の拡大を目指すことは不可能である。Rita McGrath(2014 鬼澤訳)によれば、現代社会では組織と組織との間における競争優位には永久に持続するものなど存在せず、競争優位とは一時的なものにすぎない。神戸ジャズストリートはその創世紀には確かに革新的なイベントとして存在し、他から模倣される対象となり、斬新さにおいて圧倒的競争優位にあった。しかしこの優位性は永久に持続するものではないということに気づき、神戸ジャズストリートは新たな優位性を追求すべき段階に何年も前に達しているのだ。また Rita McGrath は安定重視の思考の危うさについて次のように言及している。

「持続する優位性という想定が生み出す安定重視の姿勢は、命取りになりかねない。私の研究によると、安定が正常で変化が異常という訳ではない。実は話が逆なのだ。熾烈な競争環境では、変化ではなく安定こそがもっとも危険な状態なのである。／このことについて考えてみよう。安定という仮定はあらゆる間違っただ反応を引き起こす。既存のビジネスモデルに沿おうとする惰性と力を強める。人々の精神を型にはめ、習慣に従わせる。縄張り争いや組織の硬直化を招きやすい状況をつくる。イノベーションを妨げる。次の、前向きな戦略立案よりも、否定的な反応を助長しやすい。いまだに「チェンジ・マネジメント」が特異な活動と見なされるのは、特別な注意、訓練、経営資源が求められるからにほかならない」(McGrath 2014 鬼澤訳 p8-9)

この指摘はまさに現状の神戸ジャズストリートに当てはまる。規模の縮小を食い止め、若年層を主体とする新規観客を取り込んで発展していくには根本的な組織そのものの意識改革が必要となるということをまず浸透させなければならない。

組織としての強みとターゲットを明確にして運営を行うという点で、神戸ジャズストリートはオールドジャズとそのファンにターゲットを絞って運営されており、一見すると理想的なマーケティングが行われているように思われる。しかし音楽イベントという枠の中で考えると一つの領域に特化しすぎたものは観客の獲得機会を大幅に狭めてしまう。神戸ジャズストリートは古き良きジャズのみをジャズとして捉え、この狭義のジャズのみが演奏されることをアイデンティティーとして30年以上続いてきた。なによりもまずこの伝統至上主義的姿勢、組織としての頑固なまでの保守的な側面を取り払うことに尽力しなければならない。私が行った聞き取り調査によるとミュージシャン側からすると演奏者に門戸を広げすぎること、会場で演奏される音楽の質にバラつきが出ることに不満を感じる人も少なくはないようだが、音楽イベントとしての集客増員を目指すならば、演者に幅を持たせ、同一イベント内でうまく棲み分けさせることが重要だろう。神戸と同じように音楽イベントとして徹底した品質主義を根底において続いていたイベントにモントルー・ジャズ・フェスティバルがある。モントルーは1967年から上質な音楽を提供するべく品質主義を謳って開催されているが、このイベントが神戸と違うところはブルースやソウル、レゲエなどの狭義で見ればジャズを生業としていないアーティストも積極的に出演させ、多くの音楽ファンを獲得することに成功していることである。ここから学ぶべき箇所があることは言うまでもない。

以上を考慮したうえで、具体的にはどのような仕組みづくりが必要となるか。まずは料金体系の見直しである。神戸ジャズストリートのチケット代は開催当初から4000円前後で変化していないが、無料で観覧できるジャズストリートが全国各地に存在することを考えると今後もこの料金を維持し続けたまま観客の増員をはかることは難しい。スポンサーが少ないのでこれ以上料金を下げることはできないというのが神戸ジャズの見解であるが、スポンサーをつけるには観客の増員が求められるためまずは将来への投資と考えて料金を引き下げてみるべきではないだろうか。

またチケット収入以外で収入の増加をはかるという手も考えられる。高槻のように飲食店ブースの設置なども考えられるがここではクラウドファンディングを提案したい。クラウドファンディングとはインターネット上で組織への財源の提供を募るcrowd(群衆)とfunding(資金調達)を組み合わせた造語である。組織は財源の提供を受け、その金額に見合ったリターンを提供者に還元する。昨年国内における若手ミュージ

シャン主催のジャズイベントでクラウドファンディングを用いて開催に至った事例があったので紹介したい。

#### <JAZZ SUMMIT TOKYO の事例>

JAZZ SUMMIT TOKYO は 2015 年 8 月 29 日に六本木で行われた 90 年代生まれのアーティストによる新世代のジャズフェスティバルで、日本の音楽シーンにムーブメントを起こすという信念のもと、ぬかたまさし、石若駿、江崎文武、中山拓海ら 4 人によって企画運営された。開催に必要な経費 190 万円のうち半分以上の 100 万円をクラウドファンディングによる出資で補うという目標を立て、特設 HP が設置された。出資額は 3,000 円、10,000 円、15,000 円、20,000 円、30,000 円、100,000 円から選択でき、イベント当日の入場券、ライブレコーディング CD への氏名・団体名の掲載、リハーサル&アフターパーティー参加権などそれぞれの額に見合ったリターンが用意された。結果は目標金額の 100 万円を上回る 1,172,000 円が 107 人の支援者によって集まり、みごとイベント開催へと漕ぎ着けた。

この事例からもわかるように音楽イベントを開催するにあたってクラウドファンディングを用いて資金調達することは十分に実現可能である。ただし JAZZ SUMMIT TOKYO の場合は新進気鋭の若手アーティストたちが創造的なイベントを企画したというところに、そこへ共感した多くの出資者が集まったということが考えられ、クラウドファンディングを用いる際にはイベント企画そのものの目新しさと群衆の共感を得ることが必須といえる。神戸ジャズストリートも既存の枠を超えた新しいコンテンツを用意して現状を変えていくことが求められるだろう。クラウドファンディングのような新しい資金調達方法でチケット収入の何割かを補うことができれば料金の値下げが可能であり、またこれを用いるにあたって必然的に求められる新コンテンツによって集客の増加も期待できる。

料金面に次いで、神戸ジャズストリートの既存の出演枠の変更について提案する。現状は屋内 10 会場とオールドジャズ主体で運営されているが、このままの現状を維持しても今以上の発展は見込めない。観客の増員を期待するにはオールドジャズに特化した神戸の強みを生かしつつ出演者の年齢層と演奏される音楽のバリエーションに幅を持たせることでターゲットとなる観客層を広げることが必要だ。

オンラインチケットサービスの Eventbrite が 2000 万件以上の口コミを対象におこなった音楽フェスに関する調査では、調査対象全体のおよそ 4 割が出演者のラインアップについて話題にしており、音楽フェス参加者にとってはラインアップの充実が重要なこ



とであることがわかった。ラインアップ充実の重要性は上述の神戸と高槻の比較からも見て取れる。ただし、あまりに出演対象を拡充すると既存ファンが離れていってしまう要因になりかねないので慎重に検討するべきだろう。

屋外会場を設置し、北野を訪れる音楽ファン以外にイベントを可視化することも重要事項である。内部を可視化することで集客増に成功したものとして ABC クッキングスタジオの事例があるので紹介したい。京都大学経営管理大学院のエンタテインメントビジネス講義内で横井宏吏氏は次のように語っている。

「広告効果を高め、店舗数や会員数が大きく伸びるきっかけとなったのが、1999年のロフト大宮店への出店です。(中略) スタジオを囲う壁面をガラス張りにして、中の様子が見えるデザインを取り入れました。これこそが、私どもが提供するエンタテインメント性の象徴です。このデザインによって、スタジオの外を歩き交う人が「何か楽しそう。」と、スタジオへ興味や関心を抱くきっかけになり、また「見える化」することで、サービスに対する安心感を与え、集客効果やブランド認知が一気に高まりました。初めて来店されるお客様に、「どんなきっかけで体験レッスンに参加してくれたのか。」を尋ねると、約3割に方が「スタジオの前を通りかかったため。」と答えてくれました」(湯山 2015, p49-50)

このように内部で何が行われているのかを可視化することは、もともと興味のなかった人にも好奇心を植え付け集客効果の向上につながるのだ。神戸ジャズストリートの場合は屋内会場を外から見えるようにすることは困難なので、屋外会場を設置することでイベントの実態を可視化して行き交う人の興味と関心を引くことが手っ取り早くかつ適当であると考えられる。

ここで述べたことを要約すると神戸ジャズストリートは、料金引き下げ、扱う音楽のバリエーションの増枠、屋外会場の設置、の3点に現状維持の組織体質を捨てて取り組んでいかなければならない。料金引き下げには収入を得る新しい選択肢の検討、音楽のバリエーションを広げる際には既存ファンへの留意が必要である。以上を分析と考察をふまえた上での私からの神戸ジャズストリートへの提案としたい。

## 第7章 おわりに

本研究では神戸ジャズストリートを題材にこのような同時多発型音楽イベントにおける集客に関わる要因と改善策がわかった。今回触れた要因以外にも広告やまち全体としての参画意識などの要因が考えられるがデータ不足で十分に分析することができなかったのが今後の課題としたい。

音楽フェスのようなイベントがうまくいくかどうかには企業経営と同様に様々な要素がかかわってくるが、結局のところ一番影響を与えているのは運営する組織の風土や気質ではないかと思われる。様々な施策面での指摘を上げたところで組織全体の考え方が変わらないと何も変わらないのではないだろうか。神戸ジャズストリートは独創的な発想から生まれ順風満帆なスタートを切ったが、当初の運営形態から脱却することができず現状にいたっている。実行委員長の岩田氏にインタビューを行った際も、現状を変える必要性を頭ではわかっているが本心から納得できないため実行には移せずにいるというような印象を受けた。今までの習慣から脱し、柔軟な思考を持って変革を起こし続けようとするマインドこそが組織が存続するためには最重要事項だということを受け入れて今後も発展を続けていって欲しい。

ジャンルは違うが、国内のロック系音楽フェスが地域経済にもたらす経済効果は数億円から数十億円とも言われており、今回題材とした神戸ジャズストリートがより幅広い人間に認知・支持され北野近辺一帯が一緒になって盛り上がることで神戸市のますますの活性化に貢献すること願ってやまない。このためにはジャズストリート実行委員会に所属している神戸市職員による積極的な関与も必要になってくるだろう。行政による音楽イベントへの関与例として2014年大阪国際音楽フェスが9400万円の赤字に終わったこともあり、一筋縄ではいかないという印象を受けるが、こうした失敗例やその他の成功例からの学びを得つつ神戸市による強力な後押しにも期待したい。

## 参考文献

- ・神戸ジャズストリート実行委員会編（2011）『神戸ジャズストリートの30年』神戸新聞総合出版センター
- ・リタ・マグレイス（2014）『競争優位の終焉』（鬼澤忍訳）日本経済新聞出版社
- ・湯山茂徳編著（2015）『エンタテインメント ビジネス マネジメント講義録』朝日出版社
- ・「日本の都会にはジャズストリートが溢れているけれど・・・」,  
<<http://www.kobejazzstreet.gr.jp/spirit/index.html>>